潟環境研究所ニュースレター

Wetland Environment Research Laboratory,City of Niigata

Eホーム新入生歓迎会に協力してもらった佐潟と歩む赤塚の会メンバーとの記念撮影
写真提供　小沢　由高

第8号　2018年3月　新潟市

潟と人とのより良い関係を探求し、潟の魅力と価値を再発見・再構築。

・鯰絵展に寄せて…… P.2
・潟研とぴっくす①②③…… P.3～4
・「河童のユウタの冒険」の世界…… P.4～5
・河童のユウタの冒険
　―物語の中の生きもの―…… P.6～7
・潟のエッセイ…… P.8

「はじめて」を五感で、佐潟

村元　しおり／新潟大学人文学部３年

Eホーム８代目の代表を務めた村元さん

青森県弘前市育ち、「それなりに」をモットーに何不自由なく暮らしてきた私が、縁もゆかりもない新潟に来て、潟の魅力にどっぷりつかりました。そのきっかけは、ずばりEホームで佐潟の楽しさを知ったからです。

新潟大学には、地域貢献を目的としたダブルホームという制度があります。学部・学科の垣根を超え、学生と教職員が地域と連携して県内外の各地で地域活動に取り組んでいます。Eホーム（アース・アース）は、そのなかでも新潟市西区赤塚の佐潟で活動する市民団体の「佐潟と歩む赤塚の会」（以下、歩む会）にお世話になっています。

潟舟に乗って佐潟まつりの準備の合間に

私が歩む会のみなさんと佐潟で経験した「はじめて」は、数え切れません。サギという鳥にダイサギ、チュウサギ、コサギなどという種類があると知りませんでしたし、潟舟を漕ぐ難しさ、蓮の実の塩ゆでの味、佐潟やその周辺の地形の面白さ、虫のちょっとした声の違いも知りませんでした。また、歩む会の忘年会にEホームの学生も参加させていただいたとき、「これがうまいんだ」と柚子の皮を剥き、鯉汁に加える食べ方をはじめて教わりました。赤塚の一部の地域では柚子の皮をまるで野菜のように食す文化があるそうで、佐潟で育った鯉の脂がたっぷり浮き出た鯉汁が、柚子の風味でまた違った味わいになったあの味が今でも懐かしいです。このように、潟は「はじめて」を五感で体験できる、まさに自然の知的アジトだと私は思います。

新大祭でのハスフラワー作りワークショップ

さて、私のように潟の魅力に取りつかれた人間が多いEホームですが、現在はこんな素敵な佐潟をどうすれば効果的に発信できるか考えている最中です。Eホームには写真を撮るのが上手い人間や食べるのが大好きな人間など個性あふれるメンバーが揃っています。佐潟の自然で培われたみずみずしい感性を持つそんなメンバーと力を合わせて、もっと潟の楽しさを広めていきたいです。

鯰絵展に寄せて

中島　榮一　潟環境研究所外部相談員／潟東歴史民俗資料館 館長

蒲原の低湿地を象徴する鎧潟。その鎧潟及びその周辺の小河川には鯰（なまず）が生息していました。鯰は淡白な味が好まれる食材でした。また、鯰には地下の動きを伝える力があり、地震活動を素早く伝えると信じられ、現在も研究対象となっています。

潟東歴史民俗資料館では、2017（平成29）年10月31日から2018（平成30）年１月14日まで「鯰絵展」を開催しました。以下、その概略です。鯰絵は潟東・五之上の笹川謙六氏の所蔵品です。鯰絵は幕末に江戸で流行しましたが、それが越後で所蔵されていたことは興味深いことです。

江戸時代後半、社会不安が増大しました。例えば天保の改革の失敗、外国船の来航（黒船）、討幕運動、自然災害などがありました。

自然災害のうち、地震では越後地震（三条地震）・文政11（1824）、善光寺地震・弘化４（1847）、小田原地震・嘉永６（1853）、伊勢・東海・南海地震・安政１（1854）と連続して大地震が発生していました。

そこに安政２年（1855）、江戸の市街地を中心に大地震が発生しました。百万都市に発生した大災害です。被害も死傷者１万人弱、焼失・倒壊家屋多数・地割れなどが各地に発生、まれにみる大惨事となりました。

良寛は、三条地震をはじめとする自然災害や社会状況を、人心の頽廃（たいはい）と政治の不信の結果であると考えていました。良寛は自然を身近に感じていたに違いありません。明治以降、科学技術の進展革新に伴い、人間は限定的にしろ、自然を制御可能であるとの考えが強くなってきています。

鯰絵は安政２年の地震発生の直後から発行された浮世絵版画（錦絵）です。瓦版としても配布されているので、現在の新聞の役割も兼ね、被害状況を伝えています。それでは地震と鯰の関係はどうなっているのでしょうか。

当時の人々の間には「鯰が地中で暴れると地震が発生する」との言い伝えがありました。そのために鯰は、地震被害者にとって敵役にならざるを得ませんでした。人々にとって、誰を恨む訳にも行かない自然災害です。しかし、現実には筆舌に尽くし難い甚大なる被害が発生し、それを目の当たりにしている訳です。その怒り、恨み、悲しみなどの矛先は、地震発生の根源とされる鯰に向けられました。鯰に対して思いのたけを発散することで、怒り、恨み、悲しみの気持ちの幾分かを軽減する効果がありました。

一方、鯰を地震を発生させる悪者とするだけでなく、鯰も人間と同じく自然の中の一員として捉える心の豊かさを持ち合わせていました。それが鯰絵で「地震のお蔭で仕事にありつけた。金回りが良くなった」「地震のお蔭で生活が上向きになりそうだ」との期待感も人々に植え付けました。

鯰絵は当時の状況を、ユーモアを交え漫画化したものですが、人々がその内容に共感を覚え、話題とすることで、被害者としての気持ちを多くの人々と共有することができました。また鯰絵は、庶民の幕府に対する批判を代弁する役割も果たしました。

鯰絵「平の建舞」（写真右）には「貧富をひっかきまぜて鯰らが世を太平の建前ぞする」と書かれています。鯰の起こした地震のおかげで、社会は建築をめぐる好景気となり、貧富の差を平らにならしたと解釈できるそうです。

このように鯰絵は被害情報を伝達すると同時に、人々のつらい、怒りの気持ちを併せ、鯰の滑稽さが笑いを誘い、人々にとって大災害を乗り越える手がかりになった可能性があります。そのため、人々は競って「鯰絵」を購入、大量に販売されました。鯰絵が増えれば増えるほど、内容は多様化しました。被害者にとって精神的和らぎをもたらした鯰絵は歓迎されたに違いありません。

一方、幕府にとっては為政者への批判に当たる内容も多くみられることから鯰絵を取り締まらざるを得ませんでした。こうして鯰絵はその役割を終えることになります。

潟研とぴっくす

潟にまつわる３つの旬な話題をお届けします！

とぴっくす①　NPO法人いいろこ十二潟を守る会が十二潟の水面用地を取得！

ニュースレター第７号（2017年９月発行）で、十二潟の残された約1.6ヘクタールの水面の取得を目指しながら、保全活動に取り組むNPO法人いいろこ十二潟を守る会についての記事を掲載しました。そしてこの度、2017年12月に大勢の個人や団体からの支援を受け、無事用地の取得ができたという報告がありました。

十二潟には貴重な植物が生育しており、取得した用地を中心にして、自然環境を保全し、学校教育や地域の皆さんが楽しめるような場所として活用できるよう活動を進めていくとのことです。

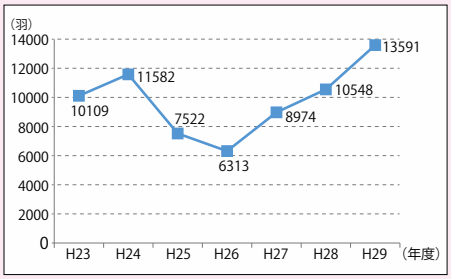
今後、貴重な潟群を次世代に引き継いでいくためにも、潟を守り続ける人々の活動をみんなで応援していきましょう！

とぴっくす②　市の鳥「ハクチョウ」について　　小林博隆／新潟市環境政策課

新潟市では、平成26年10月に市の鳥「ハクチョウ」を制定しました。ハクチョウは新潟市になじみの深い鳥で、本市の自然環境を代表する鳥であるといえます。ハクチョウは正式な名前ではありませんが、多くの市民の皆さんになじみのある名前として、オオハクチョウ、コハクチョウの総称である「ハクチョウ」としました。

新潟市はコハクチョウの越冬数が日本一で、その数は１万羽を超える程です。本市にはハクチョウがねぐらをとる潟や川がたくさんあります。また潟や川の周辺にはエサをとる田んぼが広がっています。これらの条件が重なり、ハクチョウが越冬しやすい環境ができあがっているのです。

今シーズンは、例年より早く10月下旬にコハクチョウの飛来数が１万羽を超えました。右のグラフは毎年１月に行われている調査結果ですが、今年は多くのコハクチョウが確認されています。このほか雪が多かったため、今年に入ってから佐潟に多く集まってくる傾向が顕著でした。また、昼間でもねぐらにとどまっているなど、例年とは少し違った様子も観察できました。



図．全国ガンカモ類の生息調査※における新潟市内のコハクチョウ飛来数

※環境省が各都道府県に依頼し、毎年１月にガンカモ類の飛来数を調査したもの。県内では22地点（H29年度）で調査されています。

ハクチョウのような大きな野生の生きものが、私たちの暮らしているすぐ近くで見られることは、全国でもとても珍しいことです。ハクチョウを通して、本市の豊かな自然環境を感じていただきたいと思います。

ハクチョウたちは、３月には遠く北の繁殖地に旅立って行きます。春・夏の間はお別れとなりますが、稲刈りが終わり、秋が深まってきた頃にまたやってきてくれることを願い、市民の皆さんとともに素晴らしい田園環境を持つ新潟市をいつまでも守っていきたいと思います。

市の鳥「ハクチョウ」PRの取り組み事例

市の鳥「ハクチョウ」シンボルマークを公募で決定

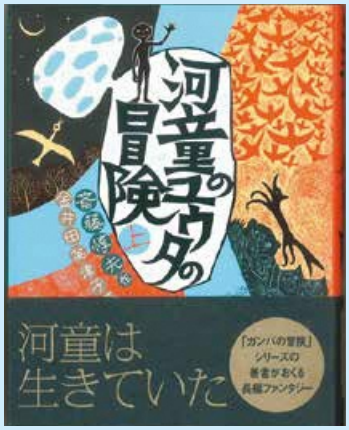
ハクチョウの特徴や越冬中の様子などを解説したガイドブックの発行

市民探鳥会の開催

このほかにも、市民の皆さんから協力いただいて実施した「にいがた市民ハクチョウ調査」（平成27・28年度）や、ハクチョウが飛来する本市の潟や田園環境の魅力を伝える「市民ハクチョウ・ホワイト・フェスタ」（平成27年度）などを開催しました。これからも、観察会などをはじめ、さまざまなPRを行っていきたいと考えています。

とぴっくす③　読んでほしいこの１冊 ― 潟環境研究所のおすすめ図書をご紹介！

「河童のユウタの冒険　上下」（福音館書店2017年刊）という本をご存じですか？
福島潟がモデルの“恵みの湖”を最初の舞台として、物語が繰り広げられていきます。
“恵みの湖”にすむ河童のユウタが、キツネのアカネと天狗のハヤテと共に、理由も目的もわからないまま“龍川”の水源を目指して旅をする、そんな冒険物語です！



「河童のユウタの冒険」（上・下巻）福音館書店刊
斎藤惇夫／作　金井田英津子／画

金井田英津子さんが描く　「恵みの湖」

福島潟在住の河童のユウタは、年齢が500歳程とのことですが、若々しく、河童の世界ではまだ青年のようです。この物語は現代が舞台であり、大河津分水が出てきたり、福島の原発事故も影を落としています。この物語には、日本人が縄文時代から培ってきた自然観、生命観、霊魂観が背景に流れており、子どもだけでなく、大人もワクワクしながら読める本です。おそらく、この本は今後日本の国民的文学になるものと思います。

大熊孝所長が自信を持っておすすめ！

「河童のユウタの冒険」の世界

高橋　郁丸　潟環境研究所協力研究員／新潟県民俗学会理事

恵みの湖

物語の始まりはユウタの住む「恵みの湖」。ここは、私たちが「福島潟」と呼んでいる潟のようです。福島潟に河童がいたなんて!!ユウタが毎日のように潟の鳥・魚・亀たちとふれあっているなんて。物語の導入部分から想像が広がりました。白鳥やオオヒシクイなど、水鳥がたくさん飛来していますが、怪我をして、人間に保護される鳥が、どんな思いでヒトの所へ来るのか。逆の立場から思うことも大切なことだと思い知らされました。

「北越奇談」にも紹介された青山御幣稲荷神社の狐

九尾の狐の子孫

河童のユウタは、ひょんなことから狐、天狗と信濃川の水源を目指す旅をすることになります。この狐はただの狐ではなく九尾の狐の子孫、アカネでした。新潟にも狐が人を化かす話がたくさんあって、ゴヘイ狐やオサンなど、名前を持つ狐が存在します。狸と違って狐はあまり目にしないので、新潟では狐はすでにいないものだと思っていましたら、数年前に新潟市内の某稲荷神社の鳥居で一匹の狐の遺体が発見されて、狐はやはり神秘的な生き物なのだと実感しました。

長野県塩尻市桔梗ヶ原に「玄蕃丞狐（げんばのじょうぎつね）」という狐がいました。この狐は男気があり、文明開化に挑んで人

を化かし続けました。玄蕃丞狐は汽車に化けて汽車と正面衝突し壮絶な最期を迎えています。野山を切り開き、開発していく人間に、何かを訴えたかったのでしょう。当時の人々も感銘をうけて神社に祀ったそうですが、アカネの祖母である九尾の狐も人間たちに何かを伝えたかったのでしょうか。

九尾であったり、アカネのように二尾であったりと、尾が裂けるのは歳を経た証拠で、「オサキ狐」と呼ばれたりもします。九尾の狐というのは平安時代、美女玉藻の前に化け、鳥羽上皇の側女となったといわれている狐です。上皇に悪い狐が取り付いたと退治されました。その狐の怨念は、近づくと死んでしまうという殺生石になりました。この石が那須野にあるので、アカネは那須野に住んでいるのでしょう。実は殺生石は室町時代に玄翁（げんのう）和尚によって砕かれ、九尾の狐は成仏したと言われています。この玄翁和尚は越後の出身ですから、アカネは新潟とも関わりがあるのです。

天狗伝説

ユウタのもう一人の仲間、天狗のハヤテ。祭と神楽が大好きな明るい天狗です。新潟にも慈光寺の天狗伝説や、山から神楽を奏する音が聞こえるという御神楽岳という山があります。長岡市小松倉には「大天狗」という石碑があり、中越地震の時に地震の害が少なかったということから平成19年に「小天狗碑」が建てられています。天狗は人々の心のよりどころになっているようです。

そしてハヤテの前に現れる狐に乗った烏天狗ですが、長岡市栃尾には長野の飯綱山で修業して飛行自由の術を得た「秋葉三尺坊大権現」が祀られています。この姿がまさにハヤテの親戚と思われる、狐に乗った天狗なのです。秋葉三尺坊はもともと人間なので、ヒトである私たちも、ハヤテになれる可能性があるかもしれません。

平成19年 長岡市小松倉に建てられた小天狗碑の祭礼

平成29年開村の湯之谷かっぱ村（折立マレットゴルフ場）

小潟稲荷神社敷地内の小潟聖観音菩薩（福島潟）

河童のこと

さて、ユウタです。三人の旅は、人々のためにこの世から消されてしまい、黒いヴェールの中にかくされてしまった魂の救済で終わります。救済にはユウタの力が必要でした。

新潟には「アイス」という湿布薬を伝えている家が数軒あります。これは、河童を助けた人に河童が伝えた薬です。十日町市では河童は「スジンコ」と呼ばれていました。これは「水神」という意味です。河童は生命の源である、水の神と考えられていたのです。ユウタはアカネ、ハヤテと共に、悲しい魂の救済をしました。

人間は便利な生活のためにたくさんの命を奪ってしまっています。現在行われている寺泊の蟹供養や新潟の蛇頭様法要にも、そのような魂の救済の意味があるのかもしれません。

たくさんの伝承を持つ福島潟

福島潟の名の由来として、「お福大蛇が紫雲寺潟の干拓から逃れてやって来たから」というものがありますが、福島潟の干拓が行われたときにお福は、鳥屋野潟に転居したとも言われています。また、亀女という妖怪が福島潟に出現したという話もあります。

ユウタも、このにぎやかな福島潟のどこかに潜んでいるのでしょうか。潟の鳥たちや虫たちに、ユウタのことを聞いてみたいですね。こんな想像が広がるユウタの物語、ぜひご一読ください。

河童のユウタの冒険 ― 物語の中の生きもの ―

物語でユウタが歌う歌の中にはたくさんの生きものがでてきます。そんなユウタの仲間たちを写真とともにご紹介します。福島潟に行ったら会えるかも!?

オオヨシキリ（大葦切）

福島潟を代表する夏鳥でヨシ原に生息するウグイスの仲間です。鳴き声から「行行子(ギョギョシ)」とも呼ばれ夏の季語にもなっています。地元では「チョチョズ」と親しまれています。

コハクチョウ（小白鳥）

「白鳥」として親しまれるカモの仲間。雌雄とも白色で幼鳥は灰色、家族群で行動します。繁殖地の極東アジア（シベリア）から4000㎞の旅をして新潟に飛来し越冬します。

河童のユウタ（金井田英津子／画）

タゲリ（田鳧）

長い冠羽が特徴で背は緑色の美しい光沢のある冬鳥です。ミューという子猫のような声で鳴き、丸みのある翼でふわふわと羽ばたき飛びます。福島潟では春先に大群が見られます。

ヒバリ（雲雀）

野原に春を告げる鳥。草原や農耕地などに生息する全長17㎝の小鳥。繁殖期が始まると、鳴きながら空高く舞い上がるオスの縄張り宣言の行動は古くから親しまれています。

ノスリ（鵟）

トビよりも一回り小さなタカで上面は褐色、下面は灰褐色です。腹面に淡褐色の羽毛があり腹巻に見えます。ネズミや小鳥などをよく食べます。福島潟ではカモを襲う行動もみられます。

天狗のハヤテ（金井田英津子／画）

カワセミ（翡翠）

宝石の翡翠（ひすい）の語源ともいわれる鮮やかな羽色で、飛ぶ宝石といわれる人気の鳥です。くちばしが体の割に長く小魚などの水中の獲物を飛び込んで捕らえます。

オジロワシ（尾白鷲）

翼を広げると畳ほどもある大型のワシの仲間です。全身濃い茶色で尾が白いので、この名があります。冬鳥として飛来し福島潟では魚のほかカモも襲うので、飛翔時は大騒ぎになります。

ヨシ（葦）

イネ科の多年草で水際に２～６ｍほどの背の高い群落をつくります。福島潟を代表する植物で、ヨシ原の風景は「豊葦原瑞穂の国」と呼ばれるように、日本の原風景を思わせます。アシともいう。

ヒシ（菱）

福島潟に多く生育する浮葉性の一年草です。水底に沈んだ種から長い茎を出し水面には葉が群生します。小さな白い花が咲き、秋に熟した菱形の果実（菱の実）は収穫され食べられています。

ガマ（蒲）

抽水性の多年草で高さ１～２ｍに生育します。夏から秋にかけて蒲の穂と呼ばれる茶色でソーセージに似た花穂をつけます。新潟の「蒲原郡」という地名は、ガマの風景を想像させます。

オニバス（鬼蓮）

スイレン科の水草で浮葉性の一年草です。葉や茎、つぼみにも硬いトゲがあります。真夏に広げる葉は２ｍを超えるものもあり、花は紫色で甘い香りがします。環境省絶滅危惧Ⅱ類。

タヌキ（狸）

体長は 40 ～ 50㎝、尾長約 15㎝、体重３～５kgで体型は丸みがあります。棲息地は主に里山ですが、福島潟でも時々親子でいるようすが見られます。農作物や生ごみも食べる雑食性です。

ギンブナ（銀鮒）

淡水魚マブナとも呼ばれます。成魚は 15 ～ 20㎝で日本各地での重要な食用淡水魚でした。福島潟周辺は幼魚を雑魚（ザッコ）といい「スズメ焼き」で縁起物として食されています。

ウシガエル（牛蛙）

1920 年前後にアメリカから食用として持ち込まれたという外来種です。最大 20㎝にもなる国内では最大級のカエルです。鳴き声は「ブオー、ブオー」とウシに似ていて食性は肉食性です。

アメリカザリガニ（アメリカ喇蛄）

体長は８㎝～ 12㎝ほどのアメリカ原産の外来種で水田や池などに生息します。子ども時代に誰もが親しんだ生きものですが、何でも食べるので緊急対策外来種に指定されています。

モクズガニ（藻屑蟹）

海で生まれ川を上りながら甲幅７～８㎝に成長します。福島潟では晩夏から晩秋に出現し、秋から冬にかけて繁殖のために海へ下ります。地元で郷土の味として親しまれています。

キツネのアカネ（金井田英津子／画）

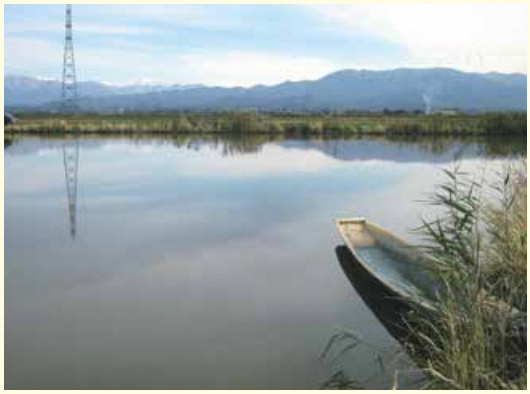
まだまだ物語の中にはたくさんの生きものが出てきますよ。
さてどんな生きものに出会えるか…。あとは読んでのお楽しみ!!

生きもの解説 ： 佐藤 安男　　生きもの写真 ： 佐藤 安男、井上 信夫、水の駅「ビュー福島潟」

「潟」のエッセイ

さて、内沼潟に生息する潟の主の正体は…!?

⑧「潟の主（ぬし）」です。ご挨拶いたします！



晩秋の内沼潟

内沼で「潟の主」の存在が噂になってます。本日は潟に暮すものを代表しご挨拶いたします。

写真の生き物が私です。大柄で体長約90㎝、体重はまだ量ったことがありません。

一般的にいえば雷魚なのですが、私を見て「潟の主」だと合掌した人がいました。

住処は、内沼潟です。面積1.15ヘクタール、水深約40センチメートル。長年のごみ投棄で汚され、水は濁っています。昔は花いっぱいで住み心地はグーでしたが、2012年、蓮が突然消え、「潟のミステリーだ」と話題になりました。

2017年、蓮の花咲き乱れる潟を目指し、新潟水辺の会さんと地元の皆さんがミステリー解明のため、魚類生物、水面標高、水の動き及び植生などの調査とヒシ・マコモの植栽を始めました。結果は魚類11種、クサガメ、スジエビ、カワリヌマエビ、アメリカザリガニ、オオタニシ、ウシガエル（幼生）などが確認されたとのことです。一方、植栽のヒシは残念ながら根付かず、その原因は不明とか…。

この調査の時、当初、私はとても戸惑いました…。潟に魚網等が入って亀や小魚さんたちが慌てたからです。私も身の危険を感じました。静かに暮らしたいのに、なぜそっとしておいてくれないのかと！

しかし、それは私の思い違いでした。調査関係者の頭の中は、唯々「潟を知りバランスのとれた利用」、そして「潟の恵みを後世に繋げる」という想いであふれていたのです。

昨秋、私は潟にあった舟に飛び込んで、呼吸も苦しく困っていました。
舟の管理にやって来た人が私を見つけた瞬間、
ビックリ仰天にらめっこ。この時ばかりは、
この世との決別を覚悟！でしたね。身の鱗もよだつほど
深刻で、まさに風前の灯です…。

そのとき、「潟に戻してやろうよ」の声が聞こえました！
危機一発！　言葉になりませんでした…。おかげで、
私は雷魚の味噌漬けにもならず、今を生きています。

森羅万象、互いに尊重し合っていくのが一番なのかな、
と感じている2018年なのです。

※今回は髙橋剛さん（内沼自治会長）が潟の主の気持ちを代弁するというユニークな形で寄稿してくれました！

新潟市潟環境研究所について

本市には、地域の暮らしに根差した「里潟（さとかた）」ともいうべき個性豊かな潟が多く残っています。当研究所は、これらの潟と人とのより良い関係を探求し、潟の魅力や価値を再発見・再構築するため、平成26年４月に発足しました。

潟に関わる多くの皆さまと連携しながら、自然環境や歴史、暮らし文化などについて、調査・研究を進めています。

新潟市 潟のデジタル博物館
NIIGATA City Wetland Digital Museum
新潟市内に点在する湖沼「潟」に関わる資料や情報をまとめたデジタル博物館です。
URL http://www.niigata-satokata.com/

潟
発　行
2018（平成30）年３月
新潟市地域・魅力創造部 潟環境研究所事務局

〒951-8550
新潟市中央区学校町通１-602-１（市役所本館４階）
☎ 025-226-2072
fax 025-224-3850
e-mail kataken@city.niigata.lg.jp
URL http://www.city.niigata.lg.jp/kurashi/kankyo/kataken/index.html
Facebook ページ